

令和 3 年 8 月 17 日現在

機関番号：37501

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2020

課題番号：18K12373

研究課題名（和文）度合いが関わる言語表現の実証的研究

研究課題名（英文）An Empirical Study of Expressions of Degree

研究代表者

東寺 祐亮 (Toji, Yusuke)

日本文理大学・工学部・助教

研究者番号：70758656

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、比較相関構文やVスギル構文といった度合いが関連する構文を中心に容認度調査を実施した。Vスギル構文「難しい論文を選びすぎた」には、「選ぶ」に焦点がある「難しい論文をたくさん選びすぎた」という解釈と、「難しい論文」に焦点がある「選んだ論文が難しすぎた」という解釈がある。本研究では、Vスギル構文や比較相関構文のこのような解釈が生じる仕組みについて、容認性アンケート調査を実施して検証した。その結果、Vスギル構文については分析の予測と同様の結果となったが、比較相関構文については提案されている分析と異なる仕組みで解釈している話者がいることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

生成文法の研究では十分に精査された母語話者の内省に基づいた言語データから分析が提案されるが、その容認性調査を行おうとした場合に、大きなばらつきが生まれることがある。しかし、それぞれの協力者の容認性判断を追跡して調べることで、頑健な観察を取り出すことができる。

その調査に特化したEPSAシステムは、照応関係の研究において実績を残している。しかし、この研究手法はこれまで照応関係という極めて限定的な部分にしか用いられていない。本研究では、度合いが関わる言語表現で使用することで、EPSAシステムがことばの研究に広く適用可能であることを示した。

研究成果の概要（英文）： In this study, we conducted a questionnaire survey focusing on expressions of degree, such as the comparative correlation construction and V-sugiru construction, in Japanese. There are two interpretations of “Sensei-ga muzukasii ronbun-o erabi sugi ta” using the V-sugiru construction, the first being “the amount of the teacher’s choice of paper was excessive,” focusing on “choosing,” and the second being “the difficulty of the paper that the teacher chose was excessive,” focusing on “difficulty.” In this study, we conducted a questionnaire survey to analyze the mechanism whereby such interpretations of the V-sugiru construction and comparative correlation construction arise. It was found that the grammaticality predicted by the analysis of V-sugiru constructions is consistent with the results of the survey, but some speakers interpret the comparative correlative constructions differently than the proposed analysis.

研究分野：日本語学

キーワード：容認性調査 Vスギル構文 比較相関構文 ホド 容認性

1. 研究開始当初の背景

生成文法の研究では十分に精査された母語話者の内省に基づいた言語データを基に文法仮説が立てられるため、母語話者がどのように容認性判断をするかは非常に重要である。そのため、必要に応じて文の容認性を複数の母語話者に判断してもらうこともある。その際、ある文を母語話者が容認可能であると判断するのか、容認不可能であると判断するのかが調査されてきた。しかし、文の容認性判断調査を行うと、協力者 A はある文を容認可能であると判断し、協力者 B は同じ文を容認不可能であると判断することもある。一見、この事実からは特性の傾向を見出すことが困難であるようにも見える。しかし、「調査協力者の容認性がばらついた」という事実は、協力者 A は容認可能になるような文理解をしており、協力者 B は容認不可能になるような文理解をしているということを示していると考えられることもできる。そうであるならば、得られたデータをすべてまとめて分析しても収束しないのは必然である。このような現状で、正確に容認性を計ろうとするならば、個人差があるということを受け入れたうえで、それぞれの協力者を区別して調査をしいてく必要があるのではないだろうか。

EPSA (Evaluation of Predicted Schematic Asymmetry) システムは前述の観点に立って構築されている、生成文法の分析を検証するための容認性アンケートシステムである。EPSA システムでは、各調査協力者がそれぞれの提示文に対してどのような判断をしたのかを追跡できるようになっている。たとえば、文 S1 を 25% 以上の容認度で判断した調査協力者を検索してその調査協力者が S2 をどのような容認度で判断したかを調べることができる。

EPSA システムは、すでに Hoji (2015) など、日本語、英語の照応関係において研究が進められ、実績を残している。しかし、本来、生成文法の分析が立てられる研究であればどのようなものに対しても適用可能な手法であるにもかかわらず、これまで極めて限定的な部分にしか用いられていない。そのため、観察・分析の検討に有用な手法であっても、他の言語表現への適用を事実上困難にしている。

2. 研究の目的

本研究では、EPSA システムを用いて度合いを表す言語表現の分析を検証することで、この研究手法が照応関係のみならず広く適用可能であることを示す。本研究では、その具体例として、V スギル構文と比較相関構文の容認性調査を行った。

3. 研究の方法

V スギル構文と比較相関構文は構造的に距離が離れている語が結びついて解釈を作ることがある。たとえば、V スギル構文の(1)は「読む」について過剰という解釈 1 も可能であるが、読んだ論文はたった一つという文脈で「ややこしさ」が過剰だという解釈 2 も可能である。比較相関構文の(2)でも「読む」に焦点があたる解釈 1 と「ややこしい」に焦点があたる解釈 2 が可能である。

- (1) V スギル構文：健はややこしい論文を読みすぎた。
解釈 1：たくさん読みすぎ 解釈 2：論文がややこしすぎ
- (2) 比較相関構文：健はややこしい論文を読むほど、疲れる。
解釈 1：たくさん読むほど疲れる 解釈 2：論文がややこしいほど疲れる

このような解釈を構築する仕組みについて、大別して 2 通りの分析が提案されている。V スギル構文に関する由本 (2005) の分析と、比較相関構文に関する石居 (2008) の分析は、(3)の「ややこしい」のような「スケールを表す語」の構造的な位置が解釈可能性を決定するということを提案している。以下、このような分析を「スケール分析」と呼び、V スギル構文を代表として紹介する。

- (3) 健はややこしい論文を読みすぎた。

一方、東寺 (2018) は、(4)の「論文」のようなモノ (動詞の場合はコト) の構造的な位置が解釈可能性を決定するという分析を提案している。以下、このような分析をモノ/コト分析と呼ぶ。

- (4) 健はややこしい論文を読みすぎた。

両者の分析はスケールやモノ/コトが深く埋め込まれる場合は非文法的になるといった共通点もあるものの、スケールやモノ/コトの位置による相違点もある。たとえば、スケール分析は(5a)の解釈になる表示が文法的であることを予測するが、(5b, c, d, e)は非文法的であることを予測する。それに対して、モノ/コト分析は(5a, b, d, e)が文法的であることを予測するが、(5c)は非文法的であることを予測する。

- (5) a. スケールとモノノコトがヲ格名詞句にある場合
先生が課題として難しい論文を選びすぎて、学生は理解できなかった。=論文が難しすぎ
- b. スケールとモノノコトがガ格名詞句にある場合
美香はソロダンスコンテストで失敗してしまった。直前に上手なダンサーが踊りすぎて、動揺してしまったからだ。=ダンサーが上手すぎ
- c. スケールとモノノコトが連体修飾節内にある場合
浩一は、[高級な車を買った] 父親を責めすぎたと反省した。≠車が高級すぎ
- d. スケールが連体修飾節内にあり、モノノコトがヲ格名詞句にある場合
授業で先生が [ややこしく書かれた] 論文を選びすぎて、学生は誰も正確に理解できなかった。=論文がややこしすぎ
- e. スケールが連体修飾節内にある複数の語の構成体であり、モノノコトがヲ格名詞句にある場合
先生が [ややこしく書かれていない] 論文を選びすぎて、学生にとっては楽な授業になった。=論文がややこしくなさすぎ

本研究では、容認性アンケート調査で V スギル構文と比較相関構文のモノノコト分析を再検討することで、EPSA システムの研究手法が照応関係のみならず広く適用可能であると示すことを目指した。

容認性アンケート調査を行うにあたって、調査者が(6)の5つのタイプを中心に作例を行った。

- (6) a. スケールとモノノコトがヲ格名詞句にある場合
b. スケールとモノノコトがガ格名詞句にある場合
c. スケールとモノノコトが連体修飾節内にある場合
d. スケールが連体修飾節内にあり、モノノコトがヲ格名詞句にある場合
e. スケールが連体修飾節内にある複数の語の構成体であり、モノノコトがヲ格名詞句にある場合

2018年度は V スギル構文の調査を行い、日本語母語話者約 50 名に対して、計 64 文についての回答を依頼した。2019年度は比較相関構文の調査を行い、日本語母語話者約 64 名に対して、計 72 文についての回答を依頼した。2020年度は V スギル構文と比較相関構文の予備調査を行い、日本語母語話者 31 名に対して、V スギル構文計 32 文、比較相関構文計 72 文についての回答を依頼した。

調査では調査協力者に web 上での回答を依頼した。回答を依頼した協力者は 18~22 歳の男女である。調査協力者は言語学に関する授業を受講しており、文の容認性判断の経験がある。web 回答システムでは、調査協力者が URL にアクセスすると、アカウントの登録の後、ランダムな順番で複数の例文が提示されるようになっている。調査協力者は提示された例文について指定の解釈が「一応許せる」か「どうしても許せない」かの 2 択で回答した。

4. 研究成果

4.1 V スギル構文と比較相関構文の容認性アンケート調査における成果

V スギル構文と比較相関構文の容認性アンケート調査の要点を示す。表 1 は 2018 年度に実施した V スギル構文の調査結果である。V スギル構文における「ヲ格名詞句にスケールとモノノコトがある場合」((6a) のタイプ) は、モノノコト分析とスケール分析の両方が文法的であることを予測する例文であるが、調査協力者の容認度は 63.2% であった。このようなばらつきがみられるのは、スギがヲ格名詞句に過剰の意味を与える構造構築が可能な話者と、不可能な話者が存在するためであると考えられる。そもそもスギと隣接する動詞以外に過剰の意味を与える構造構築ができない話者を含めると、スギの性質を検証するためのデータが得られなくなる。

そこで、(6a) タイプの容認度が 50% 以上である話者に絞り込んで(6b, c, d, e)を算出した。モノノコト分析が文法的であることを予測する(6b, d, e)の容認度は 56-73% であった。一方、非文法的であることを予測する(6c)の容認度は 12.5% であった。この結果は、モノノコト分析でおおむね説明可能な結果であった。表 1 の(6d, e)はスケールを表す語が連体修飾節内に深く埋め込まれているタイプの例文群であり、表 1 の(6d)が 60.8%、(6e)が 73.3% であるという事実は、スケール分析では説明できない。

表 1 V スギル構文の調査結果

例文のパターン	容認度
(6b)	56.5%
(6c)	12.5%
(6d)	60.8%
(6e)	73.3%

これらの調査については学会発表 として発表し、論文 として公表した。なお、本報告では絞り込み条件を(6a)の容認度が50%以上の話者にしているため、表1は学会発表 や論文 と異なる数値が記載されている。

表2は2019年度に実施した比較相関構文の調査結果である。(6a)タイプの容認度が50%以上である話者に絞り込んで(6b, c, d, e)を算出した。文法的であることを予測する(6b, d, e)の容認度は91-95%であった。一方、非文法的であることを予測する(6c)の容認度は32.1%であった。(6d)が94.3%、(6e)が91.7%であることから、モノノコト分析で説明できる可能性があるが、非文法的であることを予測する(6c)の例文群の容認度が32.3%あることから、2020年度に確認調査を行った。

表2 比較相関構文の調査結果

例文のパターン	容認度
(6b)	95.8
(6c)	32.1
(6d)	94.3
(6e)	91.7

確認調査の結果、表3に示すように、(6c)タイプは49.5%の容認度であった。この結果から、(6c)を容認する話者が一定数存在するということが示唆された。これらの話者は、比較相関構文において連体修飾節内の語を相関解釈の対象にすることができないという制限がないと考えられる。

表3 比較相関構文の確認調査結果

例文のパターン	容認度
(6a)	98.2
(6c)	49.5

容認性アンケート調査を用いた検証により、V スギル構文においては概ねモノノコト分析が支持されることが明らかになり、比較相関構文においてはモノノコト分析で提案されている制限がない話者が存在していることが明らかになった。これにより、EPSA システムを用いた分析の検証は照応関係以外でも有効であることは一定程度示すことができたと考える。

4.2 関連する言語表現における成果

本研究の進展とともに、関連する言語表現においても成果が得られた。V バ V ダケ構文は比較相関構文と同じく前件と後件の相関的な解釈が生じる構文である。これまでV バ V ダケ構文においてダケに隣接する動詞(V)以外に相関的な解釈が及ぶことは記述されていなかったが、V バ V ダケ構文においてもヲ格名詞句、ガ格名詞句に相関的な解釈が及ぶことを指摘し、観察をまとめた。この研究成果は、学会発表 として発表し、論文 として公表した。

本研究では調査例文として、スケールを表す語やモノ・コトを表す語が連体修飾節内に含まれる場合の例文を作成する必要があった。調査に影響を与えるかを確認する作業において、連体修飾節と主名詞の関係には、主名詞が連体修飾節の項になるタイプ、連体修飾節が主名詞の項になるタイプ、主名詞が持つ特性が連体修飾節の一部となるタイプ、主名詞が連体修飾節主要部から値を要求するタイプ、主名詞が連体修飾節主要部以外から値を要求するタイプの5種類があることが明らかになった。この研究成果は、論文 として公表した。また、学会発表 として発表した。

参考文献

- Hoji, Hajime (2015) Language Faculty Science, Cambridge University Press.
 石居康男 (2008)「日本語における比較相関構文について」金子義明他編『形式と意味のインターフェイス』, pp.248-258.開拓社.
 東寺祐亮 (2018)「V スギル構文の統語的条件と解釈」『日本語文法』18 (1), pp.3-19.
 由本陽子 (2005)『複合動詞・派生動詞の意味と統語—モジュール形態論から見た日英語の動詞形成』ひつじ書房.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 東寺祐亮	4. 巻 23
2. 論文標題 V/Vダケ構文の解釈と制限	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東アジア日本語教育・日本文化研究	6. 最初と最後の頁 145-158
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 東寺祐亮	4. 巻 2
2. 論文標題 容認性調査に基づくVスギル構文の分析の検証	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 KLS Selected Papers	6. 最初と最後の頁 161-176
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 東寺祐亮
2. 発表標題 容認性調査に基づくVスギル構文の分析の検証
3. 学会等名 関西言語学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 東寺祐亮
2. 発表標題 V/Vダケ構文の解釈と制限
3. 学会等名 東アジア日本語教育・日本文化研究学会2019年度国際学術大会（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 東寺祐亮
2. 発表標題 Vスギル構文における分析検証のためのデータセット作成
3. 学会等名 筑紫日本語研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 東寺祐亮
2. 発表標題 スケール名詞と連体節構造
3. 学会等名 日本語文法学会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 東寺祐亮（分担著者）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 創想社	5. 総ページ数 202-216（総ページ数318）
3. 書名 程度を表すPホドの2つの解釈（『坂口至教授退職記念日本語論集』）	

1. 著者名 東寺祐亮（分担著者）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 風間書房	5. 総ページ数 236-257（総ページ数513）
3. 書名 連体修飾節と被修飾名詞の関係 スケールを表す被修飾名詞に着目して（『筑紫日本語論叢』）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------